の人並みはずれた行動力の果実であろうと、それに欠けるわたくしは羨望の眼差をもって見上げるものであるが、本書においても文献からの引用にさいして、『種痘医北条諒斎・天然痘に挑む』で指摘したことが繰り返されているのは残念である。『立斎年表』は本文において詳細に引用しているからいいではないか、という著者の声がきこえてきそうであるが、出来れば本書の末尾にでも全文を収録していただければさらによかったのでないかとも思っている。本学会員以外の読者は、著者の目をとおしてではなく、各自の立場で『年表』を読み解く楽しみが味わえたのではないかと思うからである。

さらに些細なことかもしれないが、一、二気のついたことをあげておこう。わたくしはお玉ヶ池種痘所の設立と運営について、かねてから考察をくわえてきた。その結果はその都度、学会誌に発表してきたところであるが、川路聖謨を設立仲間に引入れた功労者は著者のいうごとく伊東玄朴ではなく、箕作院甫であろうと思っている。また設立資金を拠出した蘭方医は八二名ではなく、八三名であること、そしてなぜ一名――それは戸塚静甫である――がこの名簿から脱落してしまったかをふくめてすでに発表ずみであることをつけ加えておく。歴史の解釈はそれぞれの著者によって差異があるのは世の常であるが、事実については恣意的な取扱いは許されるべきではないと思っている。

ともあれ本書が、今後の桑田立斎研究にあたって常に座右において参考にしなければならない書物であり、立斎の周辺にみられた牛痘法の普及・発展の状況についても、本書によっておおくの知識をあたえられることは間違ない。

（深瀬　泰旦）

〔桑田立斎先生顕彰会　東京都千代田区鍛冶町一―九―一、二宮内科　電話〇三―三二五四―五〇〇七、一九九八年一二月一九日発行、A5判、三八一頁、特別価格五五九〇円、一般一五〇〇〇円〕

石田　純郎　著
『アジア医科学史散歩』

アジア各国の医療事情やその国の近代医学の受容についての断片的な報告は数多くあるが、医科学史の視点からのまとまった史跡調査はあまり目にしない。

この地域はかつての欧米の植民地であったために、その影響を抜け出し自力で国有文化の自己実現を果たしたのは二十世紀半ばを過ぎてからであり、目下その努力が続けられているのが現状である。

著者は自らの足で、韓国、台湾、香港、マカオ、カンボジア、タイ、マレーシア、ミャンマー、インドの各地に、その国々の伝統医学の現状と遺物の探訪、近代西洋医学受容の史跡と資料を求め精力的な現地調査をくり返した体験をまとめあげた。

三年前に公刊した『ヨーロッパ医科学史散歩』は渡欧する

医師、科学者には大変好評であるが、本書は前者と一と味違ったユニークなところがある。

この地域で医学史的調査をするには、各国ともその受け皿がヨーロッパ各国のようにととのっているところが極めて少ない。したがって旅行記まがいの記述をとらざるを得なかったようである。巻頭に旅行方法論として二〇ページ余をそれにあてビザ、物価、通貨の両替、公共交通の知識、食事、宿泊から治安に至るまで、失敗体験をふくめて詳述してある。

極端なことを言えば、まだこの地域の国々はその言語、習慣の多様性などもあり、一人で自由に医科学の調査を行うには大変な困難がともなうものであることを知らされる。

紹介されてある各々の国における医学史の調査、遺跡の探訪には本書を参考として、予めその国の医師、研究者との個人的なつながりを確実にしなければそれを達成することは難かしいのが実情である。医科系大学があっても日本と同様医学史研究の独立講座、研究施設に極めて乏しいことを本書は教えてくれている。韓国においては国立ソウル大学内の貴重図書室、韓独薬品医薬博物館を訪れ見学するのでも容易ではないようである。私の経験から台湾の士林にある故宮博物館に収蔵されている医薬書の古典（善本目録が出版され、館の売店にある）を閲覧し、複写するのも容易なことでなかった。台湾の医療と近代化に貢献した馬偕（G.L. Mackay 一八四四―一九〇一）の遺跡と資料館が淡水にあるが、イギリスの熱帯病学者マンソン（P. Manson 一八四四―一九二二）の研究した遺跡を訪れるのは容易ではないようである。香港医学博物館は一九九六年に開設されたばかりであるという。

タイ国ではバンコクのシリラート病院の解剖学博物館、法医学展示場などが紹介されているが、明治の初期日本で活躍したウィリス（W. Willis 一八三七―一八九七）が在勤したバンコックイギリス公使館跡などの探訪記事もあってよかったのではなかろうかとも思う。

タイの探訪記事は可成り詳細なので、これらを参考にして研究目標を設定するのには便利である。インドについてはまだその一部のみで、広大な国だけに全貌ではないし、古代から高い文化を育成して来た国だけに、今後インドだけで一本ができてもよいであろう。

中華人民共和国、モンゴル、シベリア、インドネシア、フィリピン等アジアは広いし多様な異文化を形成している。各地域にわたる民族伝統医学のあゆみを訪ね歩くことは容易ではない。本書はその探訪の第一歩を印したのであるが、今後、既に探訪を行って医科系大学の現状、組織などを知ることのできる案内書を刊行するために、アジア各国に医学史研究のキイ局に相当する研究者のつながりをより密にしてゆく情報交換が必要であることも示唆している。

アジアは観光散歩するにはてっとり早いところであるが、医科学史の散歩には周到な事前の調査、特に植民時代の宗主国で刊行されている文献での予備調査と、その国で信頼できる同学の士を見つけ、その助力を仰がなければならぬことを、

本書はあらためて教えてくれている。

各国の事情について、医師であり、医史学研究者としての視点から、各種の情報をきめ細かく、しかも自らの体験に基づきながらも冷静な客観的な視点から記述してあるのは大変参考になる。貴重な資料である。

まさに生きたアジア医科学史の散歩であるとともに文化史散歩でもあるところがユニークなところと言えるように思う。

アジア地域はその政治と同じように、文化事情も刻々と変化しつつある。その変化に応じて追加・補訂を要するのであろうし、読者自らが加筆すべきであろう。

ダイナミックに医学史研究の世界に生きている著者の行実が生々しく伝わる一書である。

（蒲原　宏）

〔考古堂書店　新潟市古町通四―五六三、電話〇二五―二二九―四〇五〇、平成十一年十二月一日、A5判、二二一頁、本体価格二、八〇〇円〕

中山　茂春　著

『筑後久留米藩医中山家系図』

著者の中山茂春氏は福岡市内で父君の後を継ぎ内科医として診療する一方、若くして医史学を志し、この方面で活発に研究している学徒である。

この度、新たに『筑後久留米藩医中山家系図』を出版されたが、これを繙けば、著者は壮大な樹木にも例えられる見事な医家家系の中にいて、歴史にのめり込むのは当然の成りゆきであることが理解できる。

この本には著者の出自である、中山家を中心として、それから派生し関連ある多数の家系が紹介されている。

そもそも中山家の淵源を辿れば、筑後地頭の宗家に求めることができる（対馬藩主宗家との縁戚も可能性があるという）。

中山家の久留米有馬藩医としての初代は道可（一七六九、明和六年没）まで遡れる。道可は筑後御原郡福童村（現福岡県小郡市）で開業していたが、有馬藩七代藩主頼徸に召し出されたのが藩医としての始まりである。

以後、代々医家として続くが、その中でも五代中山元琳（二代目元琳、一八三七―一九〇五）は、日田の広瀬淡窓とウィリスに学び、藩の医学校好生館で教鞭をとり、維新後も久留米で医学界をリードする俊英であった。このことは著者によって福岡県医報、一九九七年七月号で詳細に報告されている。

弟泰純は同じ久留米藩亀尾家の養子となり、ここからも歴代医師を輩出している。

第四代琳庵の妻シマは藩医松下家の出自であるが、この甥に松下元芳（二代元芳、一八三一―一八六九）がいる。彼は緒方適塾の塾頭を務めた秀才で、同じ九州出身で塾頭であった、福沢諭吉、長与専斎と同期であった。久留米藩の西洋医学は